＜前回：知恵文学の意義＞

（１）知恵思想成立の歴史的背景

１．旧約聖書の「知恵文学」：ヨブ記、詩篇の一部、箴言、コヘレトの言葉
　外典の知恵の書、シラ書（集会の書）

２．創造や契約をめぐる諸思想を前提として、それを古代イスラエル民族が置かれた歴史的状況（王国形成・崩壊からバビロン捕囚、地中海・オリエント世界そしてヘレニズム　世界の国際関係）において展開したものと位置付けられる。

３．知恵文学の成立の場：フォン・ラートらの旧約聖書研究→宮廷知識人、とくにエジプトの書記学校に相当する官吏養成　学校の知識人

(1)共同体の知恵（伝承）

(2)対外的な国際関係が要求する国際的な知恵

４．共同体の知恵：共同体の一員として習得すべき知恵（＝慣習的知恵）
　因果応報原理の中心的な役割。

５．知恵の教師イエス（1980 年代からのイエス・ルネサンス）
　転換的知恵（クロッサン）
　↓
イデオロギーとユートピア

（２）ヘブライ的知恵文学の思想的特徴（概要）

①創造の知恵、あるいは知恵による創造
世界に内在する法則性への信頼→神への信頼＝「神への畏れ」
　知恵思想は創造論を前提とし、それを展開する内容をもっている。この点は、下に引用した箴言８章において、神が天地創造に先だって、最初に「知恵」を創造した。

②神の創造行為の探求と称賛としての科学　→　自然を通した神の讃美
　→　自然神学（書物としての自然）

③「知恵のある生活」
日常的な実践に関わる知恵に置かれている。箴言１４章などに見られる一連の対照（「神を畏れる―神に逆らう」→「知恵―無知」、「正しい―悪しき」、「謙虚―高慢」）からもわかるように、知恵は共同体において正しく・賢明に生きることを可能にする実践的知恵、世代から世代へと伝承された知恵。共同体の知恵は共同体の集団的な自己同一性の核心に属している。

④因果応報とその限界。個人の問題として、そして共同体・民族の問題として。
この因果応報の様々な破れを鋭く描き、因果応報の限界をはっきり見据えている。
「コヘレトの言葉」（「なんという空しさ、なんという空しさ、すべては空しい」）
「ヨブ記」は、正しく生きる人間（義人）が不幸になる、という問題（義人の苦難）

（３）哲学的思惟と知恵思想との接点

６．「世界の秩序」をめぐる聖書と哲学（古代ギリシャ）の交差
　悪の問題（無、混沌、偶然、災害、不幸、無意味・・・）は、この秩序・合理性の説明と論理的に同型的な関係にある。

７．二つの書物、啓示神学と自然神学：神についての知識の獲得に関わる二つの道
・神の啓示、とくに聖書テキストに基づく神学＝啓示神学
・人間の自然的理性（理性本性）の能力による神認識＝自然神学
　創造論　→　世界は神の被造物、その中には人間理性が理解可能な合理的な秩序・法則が存在する（知恵思想）。
　→　科学的探究は神の偉大な創造行為を讃美する宗教的に意義ある行為（詩編 19 編を参照）
→　自然科学の基本前提
　自然の合理性と人間理性による理解可能性

→　合理性の一元性、認識者と対象との二つの秩序の合致。
それを保障するのが、神の合理性と創造。
神の合理性と創造は、「知恵」に集約される。

８.「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物において現れており、これを通して神について知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。」（ローマの信徒への手紙 1.20）

９．中世のスコラ学は、以上の思惟の到達点と言える。
自然神学：世界の秩序の探求から神へ
宇宙論的類型：トマス（５つの道）、ニュートン、人間原理
・経験的事実から神へ（因果律、目的論）
・運動・変化の存在／「原因―結果」の連鎖／第一原因　→　これを神と呼ぶ
芦名定道『自然神学再考――近代世界とキリスト教』晃洋書房。

10. 中世の統一的な知の世界（神の創造した合理性の客観化）
神学（啓示神学）／神学（自然神学）／哲学／自然学・諸科学
↓
・自然神学は知的世界の統合の要の位置にある。
・実在の構造　／　知識の構造　／　大学という制度的な構造　→　文明の形
（超自然/自然）

11. 研究課題：
聖書から、古代教父、中世へと、知恵思想の展開を思想史的に跡づけること。
・Ben Witherington III, *Jesus the Sage. The Pilgrimage of Wisdom*, Fortress, 1994.
旧約の知恵文学、ヘレニズム・ユダヤ教、新約聖書
・有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』（著作集４）創文社。
第二部　キリスト教における信仰と思想
第四章　知るということについて
第五章　無と創造
第六章　クレメンス・アレクサンドリヌスにおける信仰と認識
第七章　啓示信仰と神秘思想

８．　ヨブ記を読む

（1）ヨブ記の概要

１．人生の謎（悪・罪・不幸・不条理・無意味・不正義）に対して、宗教は何を語るのか。
謎に直面するときに、宗教の真価が問われる。

２．ヨブ記をどのように読むか。
・散文体での枠組みの位置づけの問題
・文学作品としてのヨブ記　→　思想にとって文学とは何か。

３．明確な論点とわかれる論点
・因果応報の破綻の後の世界
・ヨブは納得・了解したのか、救われたのか。

４．ユングのヨブ解釈
「神の変容」のプロセスにおけるヨブ記の意義。
・ヨブの道徳的な優位
・非合理的で暴虐な神から合理性を有する神（神の人間化）へ
悪の問題への対処

５．並木浩一『ヨブ記の全体像』（並木浩一著作集1）日本キリスト教団出版局、2013年。
まえがき
第一部　ヨブ記の全体像を求めて
１　ヨブ記　緒論

２　神の弁護は何を意味するか
３　対話のトラマトゥルギー　ヨブと神
第二部　ヨブ記の主張と表現の特色
１　ヨブ記のレトリック
２　ヨブ記とヤハウィスト
３　神との闘争と和解の賜物としてのヨブ記の霊性
第三部　ヨブ記に取り組んだ人々
１　ヨブ記と内村鑑三
２　ヨブ記と賀川豊彦

初出一覧
あとがき
聖句索引

＜聖書引用＞ヨブ記

・1:1 ウツの地にヨブという人がいた。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きて
いた。2 七人の息子と三人の娘を持ち、3 羊七千匹、らくだ三千頭、牛五百くびき、雌ろ
ば五百頭の財産があり、使用人も非常に多かった。彼は東の国一番の富豪であった。4 息
子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、三人の姉妹も招いて食事をするこ
とにしていた。5 この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、朝
早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。「息子たちが罪を犯し、心の中で神を呪
ったかもしれない」と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした。6 ある日、主の
前に神の使いたちが集まり、サタンも来た。7 主はサタンに言われた。「お前はどこから
来た。」「地上を巡回しておりました。ほうぼうを歩きまわっていました」とサタンは答え
た。8 主はサタンに言われた。「お前はわたしの僕ヨブに気づいたか。地上に彼ほどの者
はいまい。無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている。」9 サタンは答えた。「ヨ
ブが、利益もないのに神を敬うでしょうか。10 あなたは彼とその一族、全財産を守って
おられるではありませんか。彼の手の業をすべて祝福なさいます。お陰で、彼の家畜はそ
の地に溢れるほどです。11 ひとつこの辺で、御手を伸ばして彼の財産に触れてごらんな
さい。面と向かってあなたを呪うにちがいありません。」12 主はサタンに言われた。「そ
れでは、彼のものを一切、お前のいいようにしてみるがよい。ただし彼には、手を出すな。」
サタンは主のもとから出て行った。
・2:8 ヨブは灰の中に座り、素焼きのかけらで体中をかきむしった。9 彼の妻は、／「ど
こまでも無垢でいるのですか。神を呪って、死ぬ方がましでしょう」と言ったが、10 ヨ
ブは答えた。「お前まで愚かなことを言うのか。わたしたちは、神から幸福をいただいたの
だから、不幸もいただこうではないか。」このようになっても、彼は唇をもって罪を犯すこ
とをしなかった。
・3:1 やがてヨブは口を開き、自分の生まれた日を呪って、2 言った。3 わたしの生まれ
た日は消えうせよ。男の子をみごもったことを告げた夜も。4 その日は闇となれ。神が上
から顧みることなく／光もこれを輝かすな。
・31:35 どうか、わたしの言うことを聞いてください。見よ、わたしはここに署名する。
全能者よ、答えてください。わたしと争う者が書いた告訴状を 36 わたしはしかと肩に担
い／冠のようにして頭に結び付けよう。37 わたしの歩みの一歩一歩を彼に示し／君主の
ように彼と対決しよう。38 わたしの畑がわたしに対して叫び声をあげ／その畝が泣き 39
わたしが金を払わずに収穫を奪って食べ／持ち主を死に至らしめたことは、決してない。
もしあるというなら 40 小麦の代わりに茨が生え／大麦の代わりに雑草が生えてもよい。
ヨブは語り尽くした。
・32:1 ここで、この三人はヨブに答えるのをやめた。ヨブが自分は正しいと確信してい

たからである。2 さて、エリフは怒った。この人はブズ出身でラム族のバラクエルの子である。ヨブが神よりも自分の方が正しいと主張するので、彼は怒った。3 また、ヨブの三人の友人が、ヨブに罪のあることを示す適切な反論を見いだせなかったので、彼らに対しても怒った。4 彼らが皆、年長だったので、エリフはヨブに話しかけるのを控えていたが、5 この三人の口から何の反論も出ないのを見たので怒ったのである。

・「エリフの言葉」「33:9 わたしは潔白で、罪を犯していない。わたしは清く、とがめられる理由はない。10 それでも神はわたしに対する不満を見いだし／わたしを敵視される。11 わたしに足枷をはめ／行く道を見張っておられる。」12 ここにあなたの過ちがある、と言おう。神は人間よりも強くいます。13 なぜ、あなたは神と争おうとするのか。神はそのなさることを／いちいち説明されない。14 神は一つのことによって語られ／また、二つのことによって語られるが／人はそれに気がつかない。」

「34:1 エリフは更に言った。2 知恵ある者はわたしの言葉を聞き／知識ある者はわたしに耳を傾けよ。3 耳は言葉を聞き分け／口は食べ物を味わう。4 わたしたちは何が正しいかを見分け／何が善いかを識別しよう。5 ヨブはこう言っている。「わたしは正しい。だが神は、この主張を退けられる。6 わたしは正しいのに、うそつきとされ／罪もないのに、矢を射かけられて傷ついた。・・・神には過ちなど、決してない。全能者には不正など、決してない。11 神は人間の行いに従って報い／おのおのの歩みに従って与えられるのだ。12 神が罪を犯すことは決してない。全能者は正義を曲げられない。・・・23 人は神の前に出て裁きを受けるのだが／神はその時を定めてはおられない。24 数知れない権力者を打ち倒し／彼らに代えて他の人々を立てられる。25 彼らの行いを知っておられるので／夜の間にそれを覆し、彼らを砕き26 神に逆らう者として／見せしめに、彼らを打たれる。27 彼らが神に従わず／その道を何ひとつ受け入れなかったからだ。」

「36:1 エリフは更に言葉を続けた。2 待て、もう少しわたしに話させてくれ。神について言うべきことがまだある。3 遠くまで及ぶわたしの考えを述べて／わたしの造り主が正しいということを示そう。4 まことにわたしの言うことに偽りはない。完全な知識を持つ方をあなたに示そう。5 まことに神は力強く、たゆむことなく／力強く、知恵に満ちておられる。6 神に逆らう者を生かしてはおかず／貧しい人に正しい裁きをしてくださる。・・・15 神は貧しい人をその貧苦を通して救い出し／苦悩の中で耳を開いてくださる。16 神はあなたにも／苦難の中から出ようとする気持を与え／苦難に代えて広い所でくつろがせ／あなたのために食卓を整え／豊かな食べ物を備えてくださるのだ。17 あなたが罪人の受ける刑に服するなら／裁きの正しさが保たれるだろう。」

「37:23 全能者を見いだすことはわたしたちにはできない。神は優れた力をもって治めておられる。憐れみ深い人を苦しめることはなさらない。24 それゆえ、人は神を畏れ敬う。人の知恵はすべて顧みるに値しない。」

・38:1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。3 男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。4 わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ。

・40:1 ヨブに答えて、主は仰せになった。2 全能者と言い争う者よ、引き下がるのか。神を責めたてる者よ、答えるがよい。3 ヨブは主に答えて言った。4 わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。わたしはこの口に手を置きます。5 ひと言語りましたが、もう主張いたしません。ふた言申しましたが、もう繰り返しません。6 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。

・42:12 主はその後のヨブを以前にも増して祝福された。ヨブは、羊一万四千匹、らくだ六千頭、牛一千くびき、雌ろば一千頭を持つことになった。13 彼はまた七人の息子と三人の娘をもうけ、14 長女をエミマ、次女をケツィア、三女をケレン・プクと名付けた。15 ヨブの娘たちのように美しい娘は国中どこにもいなかった。彼女らもその兄弟と共に父の財産の分け前を受けた。16 ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見ること

ができた。17 ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。

（２）神義論と知恵思想

６．神義論を、知恵の問題として考える。新約聖書学（クロッサン）において、慣習的知恵と転換的知恵として取り出されたものを枠組みとして、そこに神義論を挟み込む。その場合、神義論は、次のような三段階のプロセスに整理される。

７．前提は慣習的知恵である：因果応報を原理として、共同体の道徳的秩序を基礎づける。悪や不幸の問いは、まず、この段階で取り扱われる。社会が安定している場合には、これで多くの問題は処理できる（罪を犯したから罰を受ける）。

1)災害や人災で、多くの不幸が現象した場合（神義論１）：この段階では、因果応報は自明性を大きく喪失し、悪の問題は慣習的知恵では納得できないことになり、いわゆる神義論が問題化する。

2)神義論２：隠された理由の示唆。神の意志・意図は人間には計りがたく神秘に閉ざされているが、現実の悪の背後には、神の意図・計画が存在するとされる。予定調和説。

3)・神義論３：しかし、悪の現実が極限に達するとき、神義論２は挫折する。この先は、二つの可能性がある。一つは、「神の不在」であり、もう一つは、「超越者の無能」である。後者は、ユングが解釈したヨブ記が典型。

８．以上の神義論の三段階の展開は、最終的に、特に、「超越者の無能」をもう一度転倒する仕方で、転換的知恵＝革命論へ、到達する、と解してはどうだろうか。しかし、転換した先が、更新された慣習的知恵であると解するとき、議論は、どうなるだろうか。

（３）神義論と哲学

９．大澤真幸『夢よりも深い覚醒へ――３・１１後の哲学』岩波新書、2012 年。

「一般に大災害は神学上の難問を提起する。・・・無差別に襲う災害は、不幸な義人を大量に生む。」

「この難問への回答が、「（苦難の）神義論(Theodicy)」である。・・・ユダヤ教がとりわけ神義論を必要としたのは、古代ユダヤ人の歴史が苦難の連続だったからである。」(175)

「どうして、ヤハウェは、ユダヤ人を救わないのか。ユダヤ人にとっては、これは重要な問題だった。」「神義論は、自分たちがまさに不幸であること、苦難の内にあるということ、このことがかえって、自分たちを（やがて）救済し、自分たちに幸福をもたらしうる、超越的な神の存在を確証させるという逆説によって成り立っている。」(176)

「神の選びの規準は非常に厳しく、また神のもたらす救済の中では、想像を絶する幸福があるはずだ。そうであるならば、現在の中途半端な繁栄の中にある者が、神によって選ばれた者のはずはなく、その程度の幸福や幸運が救済であるはずがない。逆に、今災厄の七にいるということ、まだ救済されていないということ、そのことこそ、むしろ救済の証ではないか。・・・苦難が幸福へ転換する。」(176-177)

「現在の極端な不幸が、将来における幸福であると見なすこうした訴えかけ」(177)

「苦難の神義論は、極限にまで純化させていくと、自己否定へと至る。つまり、苦難が閾値を超えて大きくなると、もはや、現在の苦難を将来の幸福の約束へと反転させることが不可能になる。」「「ヨブ記」」「徹底して突き詰められた神義論」「これは、神義論の否定でもある。」(179)

「三人の友人」「ヨブの苦難はヨブの罪に由来する。」(1809

「四人目の友人エリフ」「ヨブに罪があるかどうかということは、神が決することであって、人間であるヨブが判断することできない」、「ヨブの不幸は、神の隠れた意図の実現と見なさなければならない」、「これは典型的な「苦難の神義論」である。これがヨブを責める友人の口から出てしまったということは、「ヨブ記」が、一般の神義論を結論とせず、むしろ拒斥すべき媒介と見なしていることを示している。」(181)

「究極の逆転は、結末において、神自身が出現し、語ったことによって生じる。・・・ヨブ

の友人たちの議論を、すべて間違ったものとして一蹴し、ヨブに対しては「正しく語った」と肯定的に評価する。」(181)
「神の語りは、われわれを唖然とさせるものである。神は、ただ、自分の全能性を自慢げに誇示してかたっただけなのだ。」「神は、何を語るべきだったのか？当然、ヨブの不可解な苦難に対して、きちんとした説明をすべきだったのだ。」(182)
「無理やり自己顕示すればするほど、かえって、最初の失態が取り返せないものとして浮き彫りになる。」「苦難があまりに過酷で、しかも、それを説明できる規範的な根拠がまったく見当たらないとき、この逆説的な論理も破綻し、神の無力、神の無能性が肯定されてしまう。それほどに意味のない苦難を避けることができないということが、神には何の力もなかった、ということを示してしまうからである。」(183)
「「ヨブ記」の要諦は、極端な苦難を通じて、神の無能性が暴露されてしまう点である。」(184)
「ヨブは、イエス・キリストの予型である。ヨブとキリストを隔てる距離は、ごく小さい。ヨブの位置に、神自身が入れば、キリストになるからだ。今や、絶望的な苦難にあえぐのは、神である。「ヨブ記」においては、苦難に絶望している人間（ヨブ）とそれを救済できない無能な神とが分裂していた。この外的な分裂が、神における内的な分裂になったとき、キリストが得られる。」(185)
「今や、救済が実現しうるかどうかの一か八かの賭けに出るのは、神の方である。その結果、キリストは、十字架で死んでしまう。その死によって証明されたのは、キリストが人間であったという事実である。」(185)
洗礼者ヨハネ：「神の国は近づいた」(マルコ)、「典型的な神義論を唱えたヨハネ」
イエス：「神の国はあなたたちの中にある」（ルカ 17.21）、「神の国はあなたがたの手の届く範囲にある。」
「「救世主はすでに来た」という宣言」、「この宣言が発せされてしまえば、人は、今すぐ必死に活動しなければならない。」(191)
「ハンス・ヨナス」「エティ・ヒレスムという名前の若いユダヤ人女性の日記を引用」、「一九四二年に、ユダヤ人同胞を助け、彼らとともに苦しむために、自ら進んで、強制収容所に向かった。その決断について、彼女は日記で、神へ語りかけるとい形式で」「述べている。」
「「あなた（神）は私たちを助けることができないが、逆に、「私たちの方こそあなたをなすけることができる」、ということである。そして、「あなた」を助けることが結局、「私たち自身を助けること」でもある、と続ける。」(193)
「神が人間を救うのではなく、人間が神を救うのだ。人間は、神の救うことにおいて自分自身救うのである。」(193)

＜参考文献＞

１．フォン・ラート『イスラエルの知恵』日本基督教教団出版局。
２．並木浩一『旧約聖書における文化と人間』、『「ヨブ記」論集成』教文館。
『ヨブ記の全体像　並木浩一著作集１』日本キリスト教団出版局。
『批評としての旧約学　並木浩一著作集２』日本キリスト教団出版局。
『旧約聖書の水脈　並木浩一著作集３』日本キリスト教団出版局。
３．関根清三『旧約聖書と哲学――現代の問いのなかの一神教』岩波書店。
４．C.G.ユング『ヨブへの答え』林道義訳、みすず書房。
５．宮下聡子『ユングにおける悪と宗教的倫理』教文館。
６．アントニオ・ネグリ『ヨブ――奴隷の力』情況出版。
７．芦名定道・小原克博『キリスト教と現代――終末思想の歴史的展開』世界思想社。
８．クロッサン『イエス――あるユダヤ貧農の革命的生涯』新教出版社。
９．ボーグ『イエス・ルネサンス――現代アメリカのイエス研究』教文館。
10．並木浩一／荒井章三編『旧約聖書を学ぶ人のために』世界思想社。